



消えゆく記憶を繋ぐ場所

～ 先人達が残したものの心をつなぐ場所

concept

先大工になるには、資料書を読み、講義を受け、試験に合格するといった形式はとらない。脚の下で修業を重ね、その身体に技術をもたせこする。脚の身体に染み付いたものを、度々使いながら先大工となる。そこで、東西に 1/1 スケールの歴史的建築物を造る場を提供し、そこで育成、技術の継承に努める。

また、何かについて知らうとする時と、教科書を読んで学習するより、実際にその場で見て、自分の身体で体験することが、より効果的である。

このことから、育成・技術の継承の場を知る場を兼ね合わせた施設を構築する。

上記が踏まえ、建築的意匠についての結果とする。建築を造る際にも必ず必要となるのが、足場である。

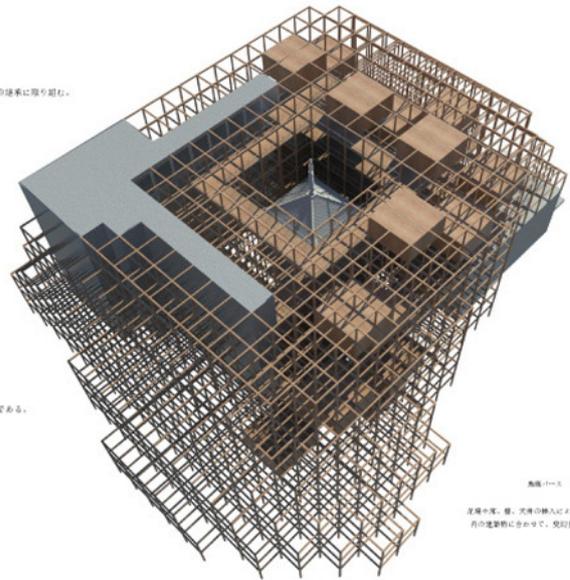
足場は、建設時に必要不可欠なもので、大工にとっては、作業の中心となる場所である。

足場には、必要に応じてその形を変えるという魅力がある。しかし、既存の足場は、細度でしかなく、最低限の機能性しか持ち合わせていない。

- ・大工の動線に一般人の動線を取り交せる。→利用者の幅の拡大
- ・動線に必要の空間を付け加える。→機能の拡大
- ・足場の柔軟性が容易であるという、可変性の表現。→デザイン性の増大

上に挙げた新たな機能を加え、足場の可能性を拡大する。つまり、姿を変えるという魅力に、新たな機能という命を吹き込み、生ける建築となるのである。

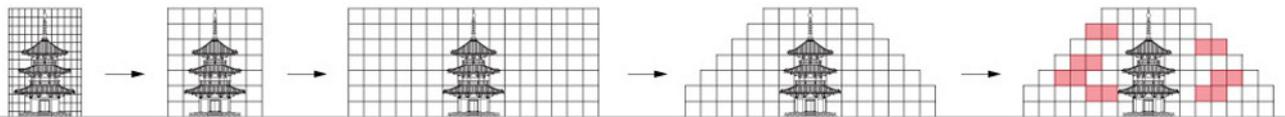
これより、法起寺の三重塔・平城京の朝堂院・法隆寺の夢殿を例に挙げてその生ける建築を世にする。



鳥瞰（パース）

足場が床、壁、天井の挿入によってできる空間は、元の建築物に合わせて、交代自在に変えられる。

diagram



建築物を造る際、作業の中心  
 既存の建築の壁・天井の挿入による空間の拡大。

この足場にのりつき、作業・継承・育成の  
 交差点かつ道具とする。

数を増やし、大工の動線に加え、一般人の動線を確保する。  
 足場に一般人を入ることで、先大工より広く見て取りあうことができ、  
 先大工について学ぶこともできるようになる。

足場の柔軟性が容易であるという柔軟性を表現するために、  
 変えられるようになり自然な足場にする。

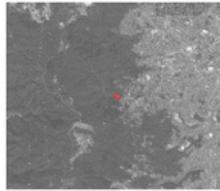
床・壁・天井などの挿入によって新たな空間が  
 生まれるのである。

## background

歴史的建築物とは何か存在するもの、これからは何年、何十年、何百年と伝えていかなければならぬもの、新しい建物が建てられられていく、そうあってはいけない。歴史的建築物を修繕・保全し、後世に受け継ぐのが吾々の使命である。彼らの身体には、代り受け継がれた技術が染み付いている。彼らの心の中や頭の中、身体に染み付いた記憶を受け継ぐことが最も大切なことなのである。今日、歴史的建築物の研究が最もその構造や使われている技術などが明らかになっている。この研究の記録は、データ化され永久に残されるだろう。これが大切なことであることは間違いない。しかし、これだけが継承に役立つ手段なのか。現在、吾々大工は減少し続けている。このままの状態が続けば、いずれいなくなってしまうだろう。誰か誰かから受け継がれてきたものを今ここで書かしてしまえばいけない。後継者の育成、後継の継承が、いま、求められていることなのである。吾々大工について知る場所、吾々大工の技術を継承する場所を構築する。

## site

計画敷地	奈良県生駒市	
周辺状況	宝山寺	徒歩 2 分
	宝山寺駅	徒歩 10 分
	梅屋敷駅	徒歩 12 分
	鳥居直駅	徒歩 28 分



敷地図 1:100



### 敷地特性

ここは、奈良と大塚の境をなす生駒山地である。生駒山はより高い山だが、大塚平野や奈良盆地を眺める景色はとて美しい。山頂からの素晴らしい眺望もまた有である。生駒山麓公園は石の土塁が自然に造られており、大塚方面からも多くの人が訪れる。

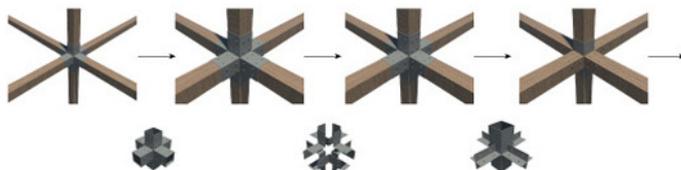
### 選定要因

吾々大工は減少し続けている。この状況は、最後の 1 人になった時、その吾々大工はどこに輪を置いているのだろうか。彼らの仕事は主に歴史的な重要な建築物の修繕・修復である。そして日本でも多くの歴史建築物や観光文化財が存在する奈良県であると考えられる。そこで奈良県に技術の継承、その情報発信の拠点を置く。その中でも、奈良の自然や風景が豊かなこの土地に選定する。

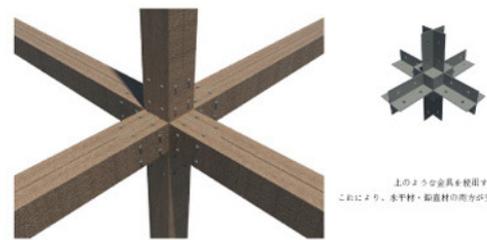
### 配置計画

この敷地は、その生駒山と奈良盆地の間にあり、自然と山の 2 つの方向性がある。2 つの方向に視界を誘導するように 2 つのコアを配置し、それと同時に、道を置くと、次第に足場が包まれた寺社・仏閣が現れるように南側のコアで南からの視界を遮る。この施設で取り扱う寺社・仏閣を完全に押し出すのではなく、少し見せることで、日本人の持つ畏れかしらさを表現している。

## Joint detail



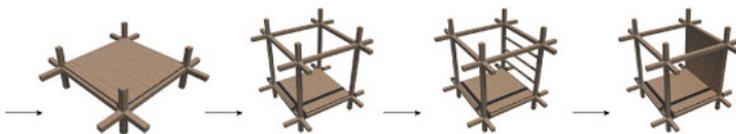
105mm 幅材を右の金具で接合する。 105mm 幅材を 3 本重ねて、210mm 幅材を形成し、左の金具で接合する。 異径の金具をばらばらにし、接合することで交換の容易さを確保する。 オルトネキ本取りが本取りで交換可能となった。 水平材においては、幅材材においては、未だ交換不可である。



上のような金具を使用する。これにより、水平材・幅材材の両方が交換可能となった。

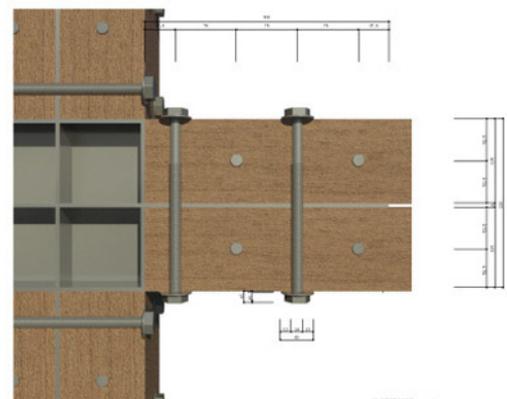


3,600mm の長さで接合部を繋ぐ。 さらに 3,600mm の幅で、面を造る。 600mm のスパンで小梁を選ぶ。



1,800mm x 900mm のパネルを張り、高さとする。 高さ方向に、3,600mm 幅の、空間を造る。 裏面に 900mm のスパンで補材を取り付ける。 構造に開口を取りながら壁を造る。

この様にしてまた新たな空間には、壁分の厚さ（給排水など）や吾々大工の道具の収納を行うことができるシステムを挿入する。この空間で、一般人の方向性によって変化した建築物の一部は、中心で包みこまれる様子を窺いながらその壁で覆われることとなる。包みこまれるその時が来て、空間に再会がなくなったとき、その空間は解き放たれて足場に戻る。また新たな循環の程には、適切な場所には、適切な場所には、この空間は現れる。この空間の出現、消滅によってまた、この建築の可能性が表現されるのである。



構造詳細図 1:2

styles of scaffolding



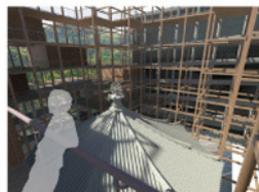
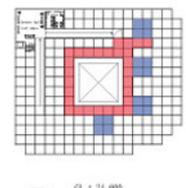
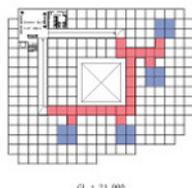
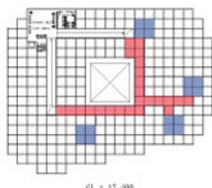
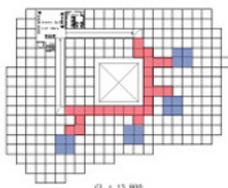
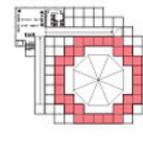
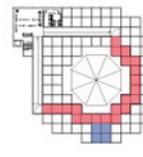
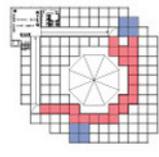
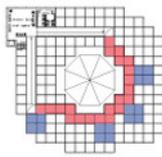
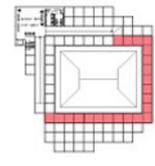
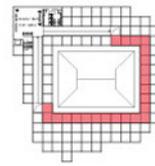
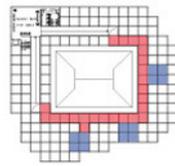
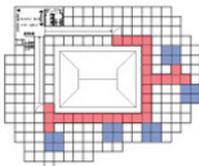
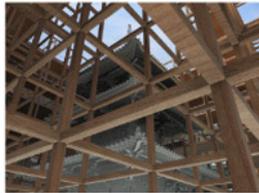
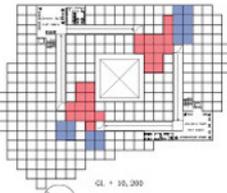
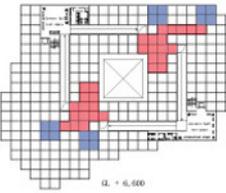
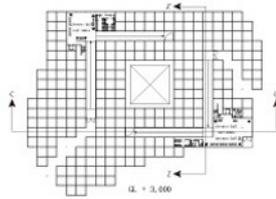
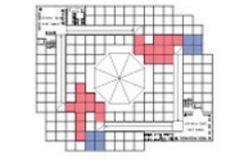
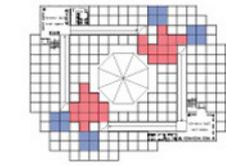
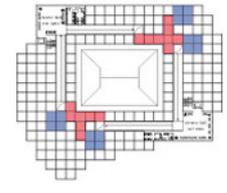
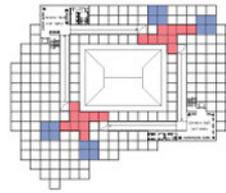
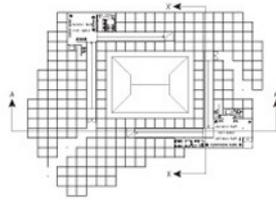
平城寺 春日宮  
 既存していない建築物で、約1000年 梁間4間、  
 平城府への移築を前提に再建。



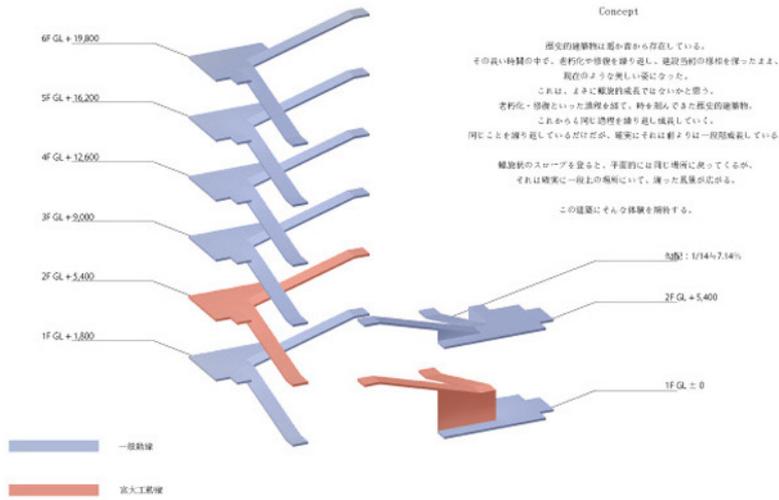
近江寺 夢殿  
 一回角 3m の八角形堂である。  
 建設当時と現在では、屋根の彫刻が異なっており、  
 研究を重ねて再現。



法住寺 三層塔  
 初層・二層の柱間が3間、三層の柱間が2間、  
 高9.2メートルで、三重塔としては日本最古・最大である。



CORE



Concept

歴史的建築物は着から存在している。  
 その古い軸線の中で、老朽化や修復を繰り返して、建設当時の様相を保ったまま、  
 現在のよくなれないままに。  
 これは、まさに歴史的成長ではないかと思う。  
 老朽化-修復といった過程を経て、時を耐えられた歴史的建築物。  
 これからも同じ過程を繰り返して成長していく。  
 同じことを繰り返しているだけだが、建築にそれよりは一段階成長している。

螺旋状のスロープを置ると、平面的には同じ場所に見えるが、  
 それは建築に一段上の場所において、違った風景が広がる。

この建築にそんな体験を期待する。

